

社会科学のフィールドワーク教育：
フィールドワーク基礎演習（2016年度）（フィールド
ワーク教育年次報告）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 幸田, るみ子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010119

社会科学のフィールドワーク教育

フィールドワーク基礎演習（2016年度）

社会科学・幸田るみ子

1. 授業の概要

人文社会科学部・社会科学では、2004年度から1年生後期の授業として「フィールドワーク基礎演習」を開講し、学生が大学を飛び出し地域社会と関わりながら学ぶ授業を展開している。この授業の目的と意義は、①社会科学専門教育の基礎の習得、②「知的好奇心」を養う場、③多様な交流と「新しい自分」の発見、④地域社会との交流の4つである。つまり「フィールドワーク基礎演習」では、メンバーが協力して地域の具体的な事例に向き合い、自発的に課題を発見し、協働して問題を解決する体験をする。その内容について発表会でプレゼンを行い、報告書にまとめる。社会科学の学生は、2年次に人間学、社会学、心理学、文化人類学、歴史学のいずれかのコースに所属するが、その基礎を1年前期の「新生セミナー」とこの後期の「フィールドワーク基礎演習」で身につけるのである。社会科学ではこの授業を学科指定科目としており、今年も社会科学1年生全員が履修した。

授業運営は、65名ほどの学生が3名の教員のもとで、時には教員・学生全体で、時には各教員がそれぞれ22名ほどの学生を担当し、また時には4～5名程度のグループで自主的に活動する。15回の授業は次のように進められた。

第1回目の授業は、全員で授業の進め方、フィールドワークの方法や実習先でのマナーなどを学び、2回目以降各教員のもとでグループを組織し、教員からのアドバイスを受けながらグループの研究テーマや方法などを考え、さらに現地調査前に必要な文献調査などを行なった。

下調べなどの準備ができたなら、アポイントメントをとって実際に現地調査に出かけた。1回だけの現地調査では足りないことが多く、2度、3度と調査に出かけることも多かった。また、調査に出た場合には、次の週では教室内で調査結果の集約、以降の調査方法などについて話し合った。現地調査にあたっては、インタビューする人、インタビューの補助をする人、写真を撮る人、記録を取る人、アポイントを取る人などなど、グループ内で役割分担や協力体制を作ることも学びの目的だった。

最後の2回の授業は再び全員が一つの教室に集まり発表会を行う。各グループは調査結果を集約し、パワーポイントのスライドを用いながら全員の前で10分程度のプレゼンテーションを行った。また、併行して『フィールドワーク基礎演習報告書』を作成した。発表会にはフィールドワーク先でお世話になった方々をご招待し、作成した報告書はフィールドワーク先にも配布した。



パワーポイントを用いたプレゼンテーション



下水道局への取材

2. 2016 年度のテーマ「住む・暮らす」

「フィールドワーク基礎演習」の授業は、既に 10 年以上にわたって実施してきており、近年は年度ごとの統一テーマを設定して、その統一テーマに沿ったフィールドワークを行なっている。

本年度担当の社会学、心理学、歴史学の 3 名の教員は、6 月頃から準備を始め、2016 年度の統一テーマを「住む・暮らす」に決定した。これまでにあまり取り上げなかったテーマで、静岡という地域社会で様々な「住む・暮らす」を探すことには多様な展開が予想された。3 人の教員は「地域イメージの演出を探す・調べる」「居住空間の歴史—家・地域・景観—」「ヒトと共存する動物の暮らし」などそれぞれの「サブテーマ」を設けた。学生に対しては、前期の新生セミナーでテーマを紹介し、「FW 演習テーマ意向調査票」の記入を通して自分が所属したいサブテーマを選択してもらい、サブグループ分けを行った。

統一テーマ、サブテーマのもとに学生が選択した今年度の具体的なテーマは以下の通りである。

- ・駿河国の城郭—縄張りの変遷と様式—
- ・動物愛護—見捨てられた動物に焦点をあてて—
- ・特異な鳥居の役割—草薙の謎の鳥居をめぐって—
- ・静岡市のお寺と神社—鉄舟寺・静岡浅間神社を訪ねて—
- ・盲導犬とユーザーの関係と彼らを取りまく環境について
- ・フィッシュ・ミール・プラントと地域社会—知られざる地場産業—
- ・駿府城下町の過去と今—家康公が造ったまち—
- ・外来種の侵略—静岡県における外来種問題と対策—
- ・なぜマンホールにデザイン性を持たせるのか—静岡の下水道にも着目して—
- ・現代までのペットと人間の関係の変遷—動物の病院に焦点をあてて—
- ・神の住まいなる教会—カトリックとプロテスタント—
- ・リバーシブルレーンから地域を読む—交通規制への注目から—
- ・静岡県における獣害とその対策
- ・狙われた静岡—防空壕と空襲の実態—
- ・七夕豪雨と静岡大学—その時学生たちは—

3. 教育効果

『フィールドワーク基礎演習報告集』の各報告の最後には、【FW を終えて】として授業を終えた学生が感想を記入するようになっている。そこには、「実際に現地に行ってみると予想外のことが沢山あった」、「自分の興味を展開するのは楽しかった」、「とてもよい経験だった」、といった声が多く書かれていた。また、みんなで協力しあったグループの仲間やアドバイスをする指導教員への感謝とともに、地域の人にお世話になったことへの感謝の言葉もたくさん聞かれた。現在の学生たちはインターネットで情報収集を行い、下調べの段階で予想される完成形を作り上げてしまうグループも少なくない。しかし、実際に自分たちが置かれている社会を実感する中で、何が本当の根拠になっているのか現場から分析する力を学んだ。それこそが、この授業のねらいの一つである。複数の班のフィールドワークの実施、プレゼンや報告書作成の指導はかなり大変であるが、専門教育への気づきの場としての「フィールドワーク基礎演習」はさらに工夫を重ねながら継続する意義があると思われる。